

今も新しい発見

発見は、とても不思議なもの。初めての経験の中で新しいことを発見するのは、当然と言えば当然ですが、同じことの繰り返しの中、ある日突然気づく発見もあります。

先日、ショパンのピアノ協奏曲第2番を前半に、休憩後の後半にシューベルトのピアノ五重奏曲《鱒》を演奏するコンサートを行いました。ショパンのコンチェルトは

©Hideki Otsuka

小山実稚恵

ピアノと私

147

公演情報

『第12回 こどもの夢ひろば“ボレロ”』
～つながる・集まる・羽ばたく～

8月1日(土) 11:15 / 14:30
日立システムズホール仙台 コンサートホール

8月2日(日) 11:15 / 14:30
日立システムズホール仙台 コンサートホール

ラヴェル：ボレロ(編曲版)ほか
問い合わせ：仙台・社の響きコンサート
☎022-302-3344

使われていきますから、高音域で輝くピアノの響きから、低音域を支えるコントラバスの響きまで、幅広い音域で音楽が躍動します。

それぞれ何度も演奏したことはありますが、今回の発見は、プログラムがこの2曲の組み合わせだったおかげだと感じています。

室内楽版での演奏でしたので、ヴァイオリン2人+ヴィオラ+チェロ+コントラバスの5人の弦楽器プレーヤーとの共演。《鱒》はピアノ五重奏。ちよつと変則の弦楽四重奏(ヴァイオリン+ヴィオラ+チェロ、コントラバス)+ピアノの作品です。シューベルトはきつとチェロだけでなく、さらに低音の響きが欲しかったのでしよう。《鱒》のピアノ・パートは高音部も多く

っていたのですが、チェロとコントラバスの響きの上にピアノののせるように弾いた方が良いのではないか、右手のパッセージを低弦の上に乗せて…と。試してみると自分でも驚くほど違う響きを作ることができました。僅かなひと工夫で、音楽もみずみずしく自然な流れになったのです。

「とても良いことに気が付いた」と、その直後の《鱒》のリハーサルでも耳を低弦パートに傾けて、ピアノをチェロとコントラバスに乗せて演奏を始めたのですが、今度は逆に弦全体とのバランスが取れない。ピアノの音質がことなく弦楽器に乘らないのです。そう言えば、普段、《鱒》を演奏する時には、私の耳は弦楽器全体に向いていたような気がして、意識を変え耳の置きどころを広げてみました。そうしたらスツと音楽がまともになっていきました。

自分の耳の機軸をどこに置くかを意識すること。それによって自然にタッチは変わり音楽も変わってゆく。コンチェルトだから室内楽だから、このほうが良いのではないか、このホールの響きならこいうするのが良いのでは、この作品はこうあるべきでは…等々、思い込みから離れて、その場の響きを素直に受け止め、耳の置きどころを意識していく。これが今回の大発見でした。

KOYAMA MICHIE 東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」(2006～17年)や「ベートーヴェン、そして…」(19～21年)は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホール・シリーズ「Concerto(以心伝心)」に続き、ソロ・リサイタルのシリーズ(未来永劫)を開催する。ショパン、チャイコフスキーの二大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「こどもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。